地域との連携で運動意欲の向上を図ろう

～下関市立勝山小学校と横浜市教育委員会（横浜市立坂本小学校）の取組から～

課題解決に向けてのポイント

- 互いに協力し合う関係つくり
- 打合せを重視する
- 教職員の理解が不可欠

互いに協力し合う関係つくり

教員養成系大学との連携

下関市立勝山小学校はコミュニティ・スクールの指定を受け、近隣の教員養成系大学の教員に学校運営評議会委員となってもらうとともに、互いの事業に協力する体制を築いている。その一環として、平成25年度に体育主任の提案のもとに、体育の授業以外で教員や学生とともにダンスを楽しむ勝山ダンススクール（KDS）がスタートし、今年も昼休みに定期的に開催されている。

▲学生がダンスの説明をする（勝山小学校）

勝山小学校では、特に高学年に、外遊びに消極的な女子が多かった。女子に外遊びを行わない理由を聞くと、校庭が男子にほとんど独占されてしまっていることをあげた。

そのため、高学年の外遊びを行わない女子や、運動に興味・関心の薄い児童に、運動がしたいと思わせるような仕掛けを企画しはじめた。体育主任の思いは、気軽に参加でき、多様な動きへの挑戦となるような場をつくりたいというものであり、構想を練るうちに「リズムダンス」にた

どりついた。ダンスは場所もとらず、音楽とちょっとしたスペースがあれば実施できる。しかし、問題はダンスを専門的に教えられる教員がいないことであった。

そこで、教材としてどの教員も気軽にできそうな市販のダンスエクササイズを選択し、なんとか実施に向けて動き出した。しかし、ただ映像を流しながら実施しても子供たちの心を動かすことができない。こうした試行錯誤の末、専門的な指導と指導補助（教員志望の学生）の派遣を近隣の教員養成系大学に依頼した。

連携する際には、片方だけが恩恵を受けるだけでは、なかなか継続は難しいであろう。そこで、勝山小学校では、相互にメリットがあるように大学に働きかけている。小学校は、学生を派遣してもらうことで、KDSの活動や授業への補助をお願いでき、大学としては、教員志望者を派遣することで、卒業研究の実践の場を提供してもらい、研究内容に対する現場の教員からの指導を受けることができる。こうして、小学校にとってだけでなく、大学にとってもメリットがある連携となっている。こうして、互いに協力し合う体制を整えているのである。

▲みんなでやってみよう！（勝山小学校）

▲みんなで輪になって楽しくダンスしよう！（勝山小学校）

地域の体育協会との連携

横浜市では、市をあげて体力の向上を推進しており、『体力アップよこはま2020プラン～子どもをたくましく生き生きとした姿に～』をスローガンに掲げている。ここでは、その方策の1つとして「地域人材の協力による、朝や休み時間等を活用した外遊びの推進」がなされている。市として積極的に学校外の力を活用していこうとするものだ。

横浜市では、地域の体育協会等と連携し、子供の体力を向上させるための運動・用具・人材の派遣を行っている。体育協会としては、これまでの取組は単発的なものにとどまり、定期的な取組には至らなかった。しかし、教育委員会と連携することで、学校の理解も得られ、定期的な取組を行うことができるようになった。

もともと横浜市は「キラキラタイム」という名称で業間に積極的に運動機会を設けていたが、学校は、何をどのように、どの程度の時間行えばよいかについては手探りで行っていた。こうした現状を解決するために、学校は体育協会から派遣された運動指導の専門家とともに、キラキラタイムの目的・内容等について改善を図った。

横浜市内にある坂本小学校もこの体制のもと、体育協会から派遣された指導員と連携して「キラキラタイム」を実施している。

参考

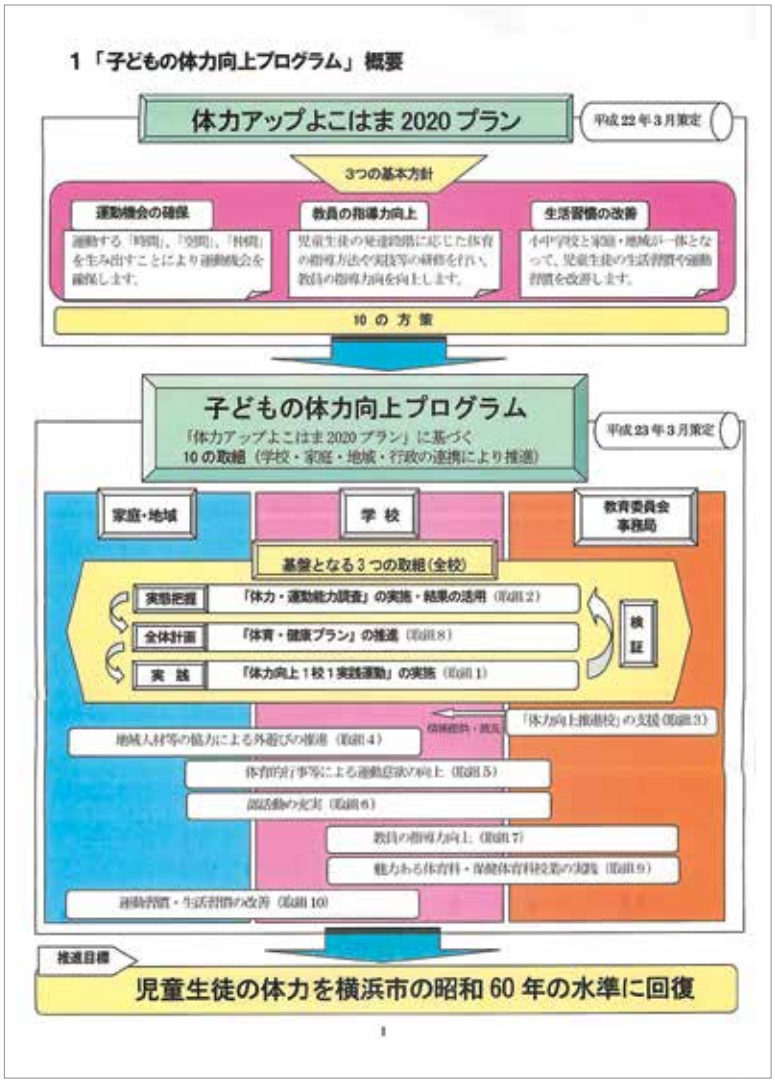
「体力アップよこはま2020プラン」

横浜市では、2020年までに小・中学校児童生徒の体力を、横浜市の昭和60年の体力水準に回復することを目標とし、体力の向上への取組を行っている。運動する機会の確保や教員の指導力向上、生活習慣の改善といった「3つの基本方針」と、それを支えるものとして、学校・家庭・地域の連携による、体力向上1校1実践運動や、地域人材の協力による休み時間等を活用した外遊びの実施など、「10の方策」の推進をあげている。

「子どもキラキラタイム」

神奈川県で、平成16年度から行われている、子供が自ら遊びや運動・スポーツに親しむ機会の確保と運動の日常化を目指した取組である。

キラキラタイムの取組には、地域と連携したものや、新体力テストを体育や健康教育に生かしたものなどがある。



▲体力アップよこはま2020プランの概要図

打合せを重視する

連絡を一本化

勝山小学校は、教員養成系大学へ、KDSのほか体育の授業における補助依頼もしている。大学への依頼は、体育主任が大学の教員に連絡し、KDSへの参加や授業の補助が可能な学生を募っている。連絡先が一本化されていれば、混乱も少なく情報の共有が図りやすい。学生には授業の合間に来てもらうことになるので、毎回同じ学生が来られるわけではない。そのため、人が交代しても活動に支障が出ないように、必ず事前の打合せを丁寧に行い、児童にも学生にも活動しやすい環境を整えている。

また、KDSでは、場所を準備したり、児童に参加を促したりするのは小学校の教員が行い、実際に指導をするのは大学生に任せている。児童らは年齢の近い学生と一つの踊りを完成させていく過程で打ち解け、いつの間にか毎回参加することが楽しみになっているようだ。将来教員になることを目指している学生にとっては、児童の実態を知る機会であると同時に、指導力の向上を図る機会ともなっている。

学校の悩みや苦労している点を共有する

坂本小学校では、年に数回体育協会の地区担当者に指導してもらう機

会をつくっている。その打ち合わせでは、体育主任と担当教員が取組の目的と年間計画の提示を行う。

打合せでは、学校側から具体的に実施上の悩みや苦労している点等が示される。それにより、担当者は具体的な提案がしやすくなっている。

例えば、9月に実施された内容では、なわとびの記録会につなげるために「キラキラタイム」において、なわとびを行うことが計画されていた。しかし、学校ではなわとびの技がなかなか達成できない児童に対する支援に不十分さを感じていた。このような相談がなされたところで提案があったのは、リズムよく跳ぶ感覚を身に付けるための教材であった。

用意するのはリズムのはっきりとした曲と、校庭にグループの数だけラインを引くだけであった。音楽に合わせて、1本のラインを踏まないように左右に跳躍したり、脚をクロスしたりしながら進む。児童はダンスを踊っているようで、楽しそうに行っていた。

▲「キラキラタイム」での取組の様子（坂本小学校）

横浜市は、こうした実践内容を年度末に報告発表する機会を設けている。体育協会としても、運動を実践するだけではなく、実践内容の情報を詳細に実践校に提供し、発表をサポートをすることで、横浜市独自のPDCAサイクルの確立を図っている。

連携を持続するには学校内の教職員の理解が不可欠

地域と連携した取組を継続させるためには、学校内の教職員の理解が不可欠である。

勝山小学校のKDSでは、まず教員の参加を得るために、誰でも知っていて多くの教員も踊ることができそうな楽曲を活用した。KDSへの参加は任意であるが、一緒に踊る教員らが増えるにつれ、児童の参加も増えた。さらに、教員養成系大学との連携の成果を県の研修会等に発表することで、学校独自のものとして周知を図り、教員間の意識を高めている。

一方、坂本小学校のキラキラタイムは曜日ごと学年別の取組であり、取組には学年の全員が参加することになっているため、その学年の担任は必ずかかわることになる。はじめは取組に消極的であった教員も、取組を続け、児童の楽しそうに活動する様子を観察するにつれ、取組に対し積極的にかかわるようになってきた。

まとめ　綿密な打合せと役割分担によって、よい関係性を築く

今回紹介した2つの事例は、学校が独自に行っているものと、市の施策により行っているものとの違いはあるものの、いずれも連携先との信頼関係を確実に深めており、今後の継続性についても期待できる取組である。

今後、より多くの地域にある人的資源を活用した、子供の体力を向上させるための取組が増えていくことを期待するが、今回紹介した2つの事例のように、外部の協力者に全てを任せてしまうのではなく、綿密な打合せと役割分担によって、互いを高め合うような、よい関係性の下で活動を継続することが望ましいといえるだろう。